

2005年オーストラリア空軍歴史会議参加報告

進藤裕之

平成17年8月12日 0840～1730の間、オーストラリア空軍歴史会議（History Conference）がオーストラリア・キャンベラ市の国立会議場で開催された。オーストラリア空軍エア・パワー開発センター（Air Power Development Centre）が主催した同会議は、隔年ごとに開かれている。今年のテーマは「エア・パワーのマスター（著名な実践者）」であり、エア・パワーの黎明期から1991年湾岸戦争までを範囲としてエア・パワーの発展と実践に名を残した指揮官等を再検討することが会議の目的であった。本会議で行われた個々の発表では、エア・パワー理論の発展に貢献した各国空軍の名指揮官等を名人たらしめた個人的な資質、経歴、体験等に焦点が当てられた。

発表者は10名で、オーストラリア人研究者とオーストラリア空軍軍人が中心であった。外国からは筆者の他に、ニュージーランドから1名が招聘された。本会議では約250名が聴講したが、大半がオーストラリア空軍関係者であった。なお、発表および質疑応答は全て英語で実施された。

会議のプログラムは、以下の通りである。

1 基調講演 オーストラリア空軍司令官 ジェフ・シェパード空軍中將

2 セッション

(1) 第一セッション「爆撃のマスター」

「ドゥーエ、トレンチャードおよびミッチェル（Gulio Douhet, Hugh Trenchard and Billy Mitchell）」

オーストラリア空軍ヒストリアン兼空軍歴史室長 クリス・クラーク博士

「ハリスとスパーツ（Sir Arthur Harris and Carl Spaatz）」

オーストラリア防衛大学校客員研究員（同大学校元助教）ジョン・マカーシー博士

(2) 第二セッション「第二次世界大戦期の欧州と北アフリカにおけるマスター」

「ダウディング（Hugh Dowding）」

ブーズ・アレン・ハミルトン社コンサルタント サル・シドティ氏

「リヒトホーフエン（Wolfram von Richthofen）」

ADI 社長 ハンス・ローザー空軍少将（退役）

「コニングムとテダー (Sir Arthur Coningham and Sir Arthur Tedder)

元ニュージーランド・キャンタバリー大学歴史学講師 ヴィンセント・オレンジ博士

(3) 第三セッション「太平洋におけるマスター」

「南郷茂男」

防衛研究所 進藤裕之

「ケニーとボストック (George Kenney and William D. Bostock)」

エア・パワー開発センター研究員 アレックス・ポスト空軍少佐

(4) 第四セッション 「第二次世界大戦後のマスター」

「ネヴォ (Yaakov Nevo, 1967年 第二次アラブ・イスラエル紛争)」

豪州 BAE システムズ社 政府関係担当重役 ピーター・ニコルソン空軍少将 (退役)

「ラル (Pratap Chandra Lal, 1971年 インド・パキスタン戦争)」

エア・パワー開発センター副所長 サヌ・カニカラ博士 (候補)

「グロッソン (Buster Glosson, 1991年 湾岸戦争)」

オーストラリア国防省 CIO グループ 戦略・将来戦部長

ゲーリー・ウォーターズ空軍准将 (退役)

3 総括

オーストラリア空軍副司令官 ロクスリー・マクレンアン空軍少将

今回の会議では、主に戦略あるいは作戦レベルの空軍指揮官（ハリス、スパーツ、リヒトホーフエン、ケニー、グロッソン等）が取り上げられた。その他にエア・パワーの理論家（ドゥーエ、トレンチャード、ミッチェル）や、戦闘部隊の指揮官（南郷）についての発表もあり、様々なレベルで活躍した指揮官が紹介された。本会議が主として議論の対象とした時代や人物は、第一次世界大戦直後から第二次世界大戦が中心ではあったが、20世紀後半の航空作戦に関わった指揮官の発表もあり、さらに、エア・パワーのご本家とも言える米・英・独・日の空軍指揮官のほかに、インドやイスラエルの指揮官も取り上げられた。このようにエア・パワーの歴史全般を多岐広範にわたって網羅する内容となり、エア・パワーの発展に功績を残した様々な個人の役割を明確にするという意味で有意義であった。

本会議の目的は、ややもすれば遠い過去の人物としてとらえがちな各国・各時代の名指揮官の資質を紹介し、さらにこれを議論することにあつたが、その目的は達成されたものと思われる。

(防衛研究所戦史部主任研究官)